

聖 書：マルコの福音書 9：38～50

説教題：塩気を保ち

日 時：2026年1月4日（朝拝）

前回の31節でイエス様は2回目の受難予告をされました。「人の子は人々の手に引き渡され、殺される。しかし、殺されて三日後によみがえる」と。このイエス様に従う弟子のあり方について前回に引き続き、今日の箇所でも語られています。色々なことが言われていますが、全体を3つに分けて読むと理解しやすくなるかと思います。第一は38～42節で他者に対する態度について。第二は43～48節で自分自身に対する態度について。第三が49～50節で全体のまとめとなる言葉です。この区分に従って以下見て行きたいと思います。

まず38～42節です。ここでヨハネがイエス様にこう言いました。「先生。あなたの名によって悪霊を追い出している人を見たので、やめさせようとしたしました。その人が私たちについて来なかつたからです。」これに対してイエス様は「やめさせてはいけません」と言われます。「わたしの名を唱えて力あるわざを行い、そのすぐ後に、わたしを悪く言える人はいません。わたしたちに反対しない人は、わたしたちの味方です」と。何が問題だったのでしょうか。それは弟子たちの党派心です。自分たちだけが特別な主の弟子であるとする偏狭な態度です。しかもその背後には他者の成功に対する妬みがあったと考えられます。ヨハネの言葉の中で問題がはっきり現れているのは「私たち」という言葉です。「その人が私たちについて来なかつたからです」と彼は言いました。もしこれが「主についてこなかつたから」であれば、まだ理解できます。しかしヨハネが問題にしたのは「私たち」というグループについて来ていないということでした。これに対してイエス様が問題にされたのは「わたしの名」をその人が唱えているかどうかでした。主の名によって行っているのであれば、やめさせてはならないと。このことからヨハネが止めさせようとした人は主を信じる別の弟子だったと考えられます。参考になるのは使徒の働き19章13～16節で、クリスチヤンではないユダヤの巡回祈祷師たちが、試しにイエス様の名を唱えて悪霊を追い出そうとしたところ、悪霊から「イエスのことは知っているし、パウロのこともよく知っている。しかし、おまえたちは何者だ」と言われ、ひどい目にあったと記されています。しかし今日の箇所の人は、そのわざが成功しています。ですから彼は主を信じるクリスチヤンだったと言えます。ルカの福音書10章を見ると、イエス様が十二使徒だけではな

く、72人を宣教に遣わした記事が出て来ます。ですからイエス様がご自身の働きのために遣わすのは十二使徒に限定されません。そのような一人が、主を信じる者として、今回のことを行なったのです。それをやめさせてはならないと主は言われたのです。

そして40節でこう言われました。「わたしたちに反対しない人は、わたしたちの味方です。」この言葉を聞いて、少し広過ぎるのではないかと感じる人もいるかもしれません。さらに進んである人はここから、キリスト教に明らかに反対しない人はイエス様の味方と言われているから、その人も救われるのではないかと考えるかもしれません。しかしそういうことをイエス様は言われたわけではありません。これとよく比較される言葉としてルカの福音書11章23節には次のような言葉があります。「わたしに味方しない者はわたしに敵対し、わたしとともに集めない者は散らしているのです。」ここではイエス様の側に積極的に立たない人は、イエス様の敵であると言われています。そして続けて空っぽの家のたとえが語られています。仮に悪霊がその人から出て行っても、その人の内が空のままであれば、再び悪霊が戻り、もっと悪い7つの霊を連れて来て住みつくというたとえです。つまり中立の状態はないということです。イエス様を受け入れなければ、人は最終的に神に敵対する者となります。では今日の箇所はどのように理解すれば良いでしょうか。ここで語られているのは弟子の立場から周囲の人々をどう見るかということです。自分たちと同じグループでないからと言って否定してはならない。自分たちに反対して來るのでなければ、主の名で活動する他の人々にこちらから敵対してはならない。むしろその人たちは味方として受け止めるべきである。「やめさせる」などというようなことをしてはならない——イエス様はそのように言われたのです。

41～42節も同じ流れにある言葉と見ることができます。「あなたがたがキリストに属する者だということで、あなたがたに一杯の水を飲ませてくれる人」とは明らかに十二使徒以外の人たちです。その人がしてくれるのは水一杯を差し出すという、ある意味ではとても小さな働きです。しかし主は、そのような小さな働きを決して軽んじられません。その人は「決して報いを失うことがありません」と言われています。ですから弟子たちは自分たちの狭い基準や偏狭な目で、そのような人々の働きを見下したり、取るに足らないものとして扱ったりしてはならないということです。私たちが下す評価と主が下される評価は大きく異なることがあるのです。42節もそうです。そこでは「わたしを信じるこの小さい者たちの一人をつまずかせ」てはならないと言わ

れています。弟子たちの周りにいる人たちは信者で、その人たちは小さい者たちと言われる人たちかもしれません。前回の箇所では弟子たちは「誰が一番偉いか」と論じ合っていました。そして今回も「自分たち以外に奇跡を行って成功しているなど許さない」という態度を示しています。そういう弟子たちが、自分たちこそ偉いのだという誤った特権意識を持ち、その結果として小さい者たちをつまずかせるなら、その人は「大きな石臼を首に結び付けられて、海に投げ込まれてしまうほうがよい」とイエス様は言われます。それほどまでにイエス様は小さい者たちを大切にしておられるということです。前回の御言葉と同じです。誤った特権意識によって他者をつまずかせないように！むしろ小さい者たちを重んじ、大切にすること。主はそういった人々を用いてご自身の働きを進められることがあること。そのことを覚えて、へりくだり、謙遜に歩むように——主はそのように言われたのです。

次に 43～48 節にかけては自分自身に対する態度について語られています。主の弟子は人のことを批評する前に、まず自分自身の歩みに注意を向けなければならないということです。ここにもしあなたの手が、足が、目が、あなたをつまずかせるならとあります。これは、それらが主の弟子としての歩みを少しでも妨げるならという意味です。手は行いを、足は行く先を、目は見ることを象徴します。これらが主に従う聖い歩みを妨げるなら、それを切り捨てなさいと主は言われます。私たちは思わず強い衝撃を受けます。確かに両手、両足、両目がそろったままゲヘナに投げ込まれるよりはまだましだということは分かります。ゲヘナとは地獄の象徴です。48 節に「ゲヘナでは、彼らを食らううじ虫が尽きることがなく、火も消えることがありません」とあります。そこへ行ったら取り返しがつきません。ですからまだ片手、片足、片目を失うだけで済む方が良い。

しかし私たちはこの御言葉をどのように自分に適用したら良いのでしょうか。これは文字通り行うべきことなのでしょうか。そうではないと考えられます。歴史の中には、これを文字通り実行した人々もいたようですが、そうしたところで私たちの問題は解決しません。問題の根はもっと深いところにあるからです。体の一部を切り捨てても心にある問題はまた別の形で表れて来ます。ですからこれは誇張表現であり、最初から文字通りの実行が求められている言葉ではありません。しかしだからと言って安心して聞き流して良い言葉なのでもありません。イエス様がここで語っておられるのは、手や足や目という私たちにとって極めて大切なよりも、神の国に入ること

の方がはるかに価値が高いということです。その測り知れない価値を持つ祝福に入るためには、この地上でどのような犠牲を払うことになったとしても真剣に取り組むべきだということです。悔い改めの生活がどれほど苦痛を伴うとしても、地獄で滅びる者となるよりははるかにましです。だからこそ自分の内にある罪と戦わなければなりません。罪と和解し、共存するという状態はあり得ません。罪と戦わなければ、やがてその罪に自分が支配されてしまいます。ですから人の課題を云々する前に、まず自分の内に大きな課題があることをわきまえ、主の聖めを祈り求めて、真摯にこれに取り組む者でなければならない——そのように主は教えておられます。

最後 49～50 節では「火」と「塩」について語られています。まず「火」とは何でしょうか。48 節ではゲヘナの「火」が述べられていましたが、火とは真価を試すものです。それはさばきの道具ともなり得ますし、また真に価値あるものをきよめ、精錬するものともなり得ます。49 節は信者について語られていますから、これは後者の意味です。主の弟子として歩む際に通ることを求められる様々な試練や迫害、またそれに伴う犠牲や厳しい戦い、そういったものを指すと考えられます。そのような試練や苦しみや戦いの「火」を通してクリスチャンは聖められます。そして「塩気」をつけられます。この「塩気」とは主の弟子らしい特質のことだと考えられます。クリスチャンとはこのような「塩気」を持っている者たちです。ここで思い起されるのが、マタイの福音書 5 章 13 節の次の主の言葉です。「あなたがたは地の塩です。もし塩が塩気をなくしたら、何によって塩気をつけるのでしょうか。もう何の役にも立たず、外に投げ捨てられ、人々に踏みつけられるだけです。」 塩はまず防腐剤としての役割を果たします。肉に塩がすり込まれて腐敗を遅らせるように、クリスチャンもこの世の様々な場所へ遣わされ、世の腐敗を少しでも食い止める働きを与えられています。それと同時に塩は美味しい味を提供するものもあります。塩気がなければ料理に味がありません。つまりクリスチャンは塩気を持つ者たちとして、人生の旨味、すなわち神とともに歩む人生がどれほど豊かで味わい深いものであるかを、言葉と生き方を通して伝える者たちとしても、この世に遣わされています。そんな私たちにもし塩気がなければ、その存在意味はなくなってしまいます。ともすると私たちは世と違っていることを恥じ、あるいは嫌い、世に調子を合わせようとする誘惑を受けますが、そのようにしてしまえば意味がなくなってしまいます。むしろ違っているからこそ意味があるのです。

イエス様は最後に「あなたがたは自分自身のうちに塩気を保ち、互いに平和に過ごしなさい」と言われます。この「塩気」と「平和」という言葉の組み合わせを見て、少し意外な印象を受ける方もおられるかもしれません。というのも時にクリスチャンの「塩気」と言うと、人目を気にせず、ピリッとした辛口の意見も臆せぬ述べる人、厳しい言葉をストレートに語る人のことを思い浮かべことがあるからです。しかし参考になるのはコロサイ人への手紙4章6節:「あなたがたのことばが、いつも親切で、塩味の効いたものであるようにしなさい。」ここでは塩味のきいた言葉が親切な言葉と結び付けられています。決して尖った言葉や攻撃的な言葉のことではありません。そして、もし塩味のきいた言葉が親切な言葉であるなら、それは確かに平和につながるものになるでしょう。では今日の箇所全体の文脈に沿って考えると、イエス様が言われた「塩気」とは何を意味しているでしょうか。

まずは直前に語られた自らに対する厳しい自己訓練の姿勢を指していると言えるでしょう。他人の課題よりも、まず自分自身の課題に目を向け、自らの靈的成長を目指す人からにじみ出て来る特質です。またさらにその前に遡れば、それは他者を認め、尊敬し、重んじる姿勢でもあります。自分の地位や名誉を求めるのではなく、そのために他の人を排除しようとするのでもありません。むしろ小さい者たちを大事にし、心にかけ、そのような人々を通してなされる主のみわざを見出し、それを評価し、尊び、主をあがめる人です。このような「塩気」を持つことを私たちは自分たちの課題として行かなければなりません。そのような塩気が私たちの間にあるなら、そこには確かにこの世にはない平和が見られるはずでしょう。そしてその歩みを通してこそ、主の弟子は世に対して良い影響力を持ち、地の塩としての働きを果たすことができる者とされるのです。

私たちにこの塩気は見られるでしょうか。私たちはともすると、弟子たちと同じように、これと正反対の歩みをしてしまいやすい者たちです。偏狭な態度で、自分たちだけが正しいと思い込み、自分が一番でないと気が済まない。他の成功している人たちを妬み、やっかみ、時には妨害するようなことさえする。また神が大切にしておられる小さい者たちを自分勝手な見方で軽んじ、つまずかせてしまう。その一方、自分の罪には目を向けず、自分には甘く、取り組むべき課題を放置する。これは主が私たちに求めておられる姿とは全く逆の歩みです。

この新しい年を主の弟子として歩み始めるにあたり、私たちは今日の御言葉で教えられた通り、まず自分の罪の問題に向き合い、靈的に成長できるよう、主の聖めを祈り求めて歩みたいと思います。また他者を認め、大切にすること、自分の判断だけが正しいと思い込まないこと、主の働きは私たちの思いを越えて広く大きなものであり、主はしばしば私たちの目に小さく思える人々の働きを用いてみわざを進められること——そのことを覚え、主の御前にへりくだり、主をあがめる者でありますと願います。そして、主の弟子としての塩気を私たちの間に豊かに保ち、さらに豊かに与えられる歩みへ進みたいと思います。そして私たちの愛台にある平和の歩みを通して主を証しし、主の栄光のために用いていただく、そのような一年となることを御前に祈り求めて歩んで行きたいと思います。